国研紀要158（2021.10）：219–225

〈書評〉

漢訳聖書研究の新たな地平を目指して

——永井崇弘・塩山正純編（2021）『ラサール訳『嘉音遵嘱嘮菩薩之語』—研究と影印・翻刻—』に寄せて——
（愛知大学国研叢書第４期第５冊、あるむ、2021.3）

内田　慶市

この10数年来、漢訳聖書研究において極めて重要な資料が相次いで発見されている。とりわけ次の２つの発見は漢訳聖書研究をこれまでとは全く異なる次元の高みへと導くものであった。

１つはジャン・バセ（Jean Basset, 白日昇、1662–1707）の「四史攸編」の全ての版本の発見であり、もう１つはこれまでその存在は示されていながら所在が明らかにされず「幻の聖書」と言われてきた『古新聖経』の発見である。

世界で最初の旧新約聖書全体の漢訳は「二馬」と呼ばれる二人の宣教師によって行われた。「二馬」とは一人は英国ロンドン伝道会宣教師「馬禮遜（Robert Morrison, 1782–1834）」、もう一人は同じく英国のバプティスト伝道会宣教師の「馬士曼（Joshua Marshman, 1768–1837）」である。

モリソン訳漢訳聖書は先ず1810年に使徒行伝が出版され、その後、1814年に新約聖書である『新遺詔書』が、そして1823年に旧約と新約の両方を収めた『神天聖書』が刊行された。

一方、マーシュマン訳漢訳聖書は澳門生まれのラサール（Johannes Lassar）の協力の下、1810年にマタイの福音書（『此嘉語由呀挑所著』この「嘉語」は吉川2018の記述を元にしたもので、おそらくは「嘉音」とすべきだと考えるが今保留とする）とマルコの福音書（『此嘉音由呀嘮所著』）を、1813年にヨハネの福音書と使徒ヨハネの書簡を漢訳し、1816年には新約聖書全部の漢訳を完成させ、1822年に旧新約聖書をインドのセランポールにおいて出版した。

なお、ラサール単独でも1804年に創世記とマタイの福音書を、1807年にもマタイ福音書（今回の書評で取り上げる『嘉音遵嘱咷菩薩之語』）を漢訳している。

さて、こうした「二馬」による漢訳聖書のうち特に新約聖書においては、その元になったものとして、大英図書館に所蔵されている『四史攸編』の存在が早くから指摘がされていた。たとえば、モリソン夫人（Eliza Morrison）の手になる『モリソン回顧録』（*Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, 1839）にも次のような記述がある（今、原文の英語は省略する）。

> 福音書と、使徒行伝、啓示録は、すべて私自身による翻訳である。「新約聖書」の中間の部分は、大英博物館に保存されている、無名氏の翻訳を元にしているが、私はそれに対して必要な修正と補充を行った。
>
> イギリス聖経公会が創立した当初、中国を目標の一つとし、また大英博物館には一部の「新約聖書」の中国語版稿本が所蔵されている情報をつかんでいて、それを出版しようという考えを有していたが、その後の調査でいったんはその構想はたち切れとなった。
>
> モリソンは、漢字が書けるようになると、大英博物館所蔵の中国語版聖書稿本を筆写し始めた。それには「ヘブル書」を除く、「四福音書」「使徒行伝」「パオロの手紙」が含まれていた。

この『四史攸編』のモリソンによる書写本は香港大學図書館にも収められているが、この漢訳者がジャン・バセであるとしたのが矢沢利彦1967であり、それはすでに定説となっている。このジャン・バセの『四史攸編』の別の稿本がその後、ローマのカサナテンセ図書館で発見されたのだ。2009年４月、その写真を北京外国語大学の張西平教授から見せられて驚いた評者はすぐその年の夏にカサナテンセを訪れて現物を手にすることができた。

大英図書館本とカサナテンセ本の最大の違いは、大英図書館本は「Diatesseron」つまり「Harmony of the Gospels」（総合福音書）であって、たとえば、第一章は「ルカの冒頭部分」―「ヨハネの冒頭部分」―「ルカ第

一章」―「マタイ第一章」から成るという、いわゆる「シャッフル」版であるが、カサナテンセ本はモリソンの『神天聖書』と同様に新約聖書の順序通りに翻訳されている。なお、その後、シャッフル版の別の稿本がケンブリッジ大学図書館でも発見され、現在まで、バセの稿本は 4 種あるということになる。

実は、このバセの稿本はモリソンの漢訳聖書のみならず、マーシュマン・ラサールの漢訳の際にも多いに利用されたことが分かっており、バセ稿本の詳細なる考察により、「二馬」の漢訳聖書との継承関係とバセ以前の漢訳聖書との関わり、すなわち「漢訳聖書の系譜」を明らかにする大きな手がかりとなるはずである。

2 つめの発見の『古新聖経』はイエズス会宣教師ポアロ（賀清泰）によるものであるが、Pfister（費賴之、1833–1891）や徐宗澤（1866–1947）などが、それが上海徐家匯藏書樓と北京遣使會圖書館（北堂）に所蔵されていることは夙に明らかにしていたが、彼ら以降、現物はずっと見つからぬままであった。それが、先ず上海徐家匯藏書樓本が発見され、その後、北堂本の写真が、更には、満漢合璧本、満洲語本も陸続と発見されたのである。現在、上海徐家匯藏書樓本は中華書局から全巻の影印が出版され、北堂本と満漢合璧本は評者と台湾中央研究院の李奭學氏によって影印本が出版された。

この『古新聖経』は、中国語における文体論の観点から極めて重要な資料であり、北京官話を用いた白話体が採用されているのが最大の特徴である。漢訳聖書においていかなる文体を採用するかは各翻訳者が最も頭を悩ませたところである。つまり、どのような文体で漢訳すれば中国人に伝わるかをとことん吟味したからである。たとえば、モリソンの文体は後述の Spillett の分類によれば文理体（文言）であるが、実際には文白混淆体であり、モリソンは当初、更に俗な「白話体」をと考えたが、結局は「俗」の中に「雅」を含む『三国演義』に模した文体を採用したのであった。

また『古新聖経』は最初は満洲語で書かれたものであり、評者によって発見されたロシア科学アカデミー・サンクト・ペテルブルク東方文献研究所蔵のものは満洲語と中国語の対訳である満漢合璧である。満洲語のものは現在、東洋文庫に所蔵されているが、いずれにしても、いわゆる「言語

接触」研究、とりわけ、中国語の「漢児言語」あるいは「擬蒙漢語」と言われる「言語接触」によって生まれた言語の研究や中国近代語史研究には非常に有益な資料である。

さて、この度、こうした資料に加えて、これまでほとんど目に触れることのなかった新しい資料を私たちは手にすることができた。永井崇弘君と塩山正純君という今まさに脂ののった研究者によって上梓された『ラサール訳『嘉音遵嘱咶菩薩之語』―研究と影印・翻刻―』がそれである。

本書は「研究篇」と「資料篇」さらに「影印・翻刻篇」の3部に分かれるが、「研究篇」の目次は次の通りである

はじめに

プロテスタントによる再早期のインド伝動

プロテスタントによる漢訳聖書の最初の翻訳者ラサールと聖書漢訳の経緯

ラサール訳『嘉音遵嘱咶菩薩之語』について

ラサール訳の底本の可能性がある聖書

ラサール訳『嘉音遵嘱咶菩薩之語』の底本

『嘉音遵嘱咶菩薩之語』における音訳語

おわりに

「資料篇」では「音訳語対照表」が付され、「影印・翻刻篇」ではラサール訳本の稿本影印とその翻刻が載せられている。

先ず、研究篇では、これまでの漢訳聖書研究では余り取り上げられることのなかったインドにおけるキリスト教伝道の状況を簡潔に記した後、プロテスタント宣教師による最初の漢訳聖書の翻訳者であるラサールを取り上げ、ラサールの生平、その漢訳の経緯、内容、さらに、ラサールが元にした底本について詳しく論じている。

たとえば、マーシュマンはラサールとの協働によって上述の漢訳聖書を出版したが、ラサールは単独でも1805年（これまでの研究では1804年とされていた）に創世記とマタイ福音書の一部を、さらに、1807年にマタイ福音書を翻訳したことがB. F. B. S（British and Foreign Bible Society）の報告書などを駆使しながら本書で明らかにされている。

『嘉音遵嘱咶菩薩之語』というタイトルについては、「The Gospel

According to St. Matthew」の中国語訳とする。つまり、Gospel= 嘉音、According ＝遵、St. ＝菩薩、Matthew ＝嘱咷、それに「嘉音遵嘱咷菩薩」では中国語として落ち着かないので「之語」を付けたとしている。ただ、「St. Matthew」が「咷＋菩薩」と語順が逆になっているのは気になるところである。もちろん、古い中国語、南方中国語では修飾語は後置されるということがあるからこれで問題はないと思われる。

ラサールのこの『嘉音遵嘱咷菩薩之語』の底本についても、可能性のあるギリシャ語本文、英語訳、古典アルメニア語訳との詳細なる比較を通じて英語欽定訳および古典アルメニア語訳であると結論づけている。

音訳語については、モリソン訳及びマーシュマン共訳と、この『嘉音遵嘱咷菩薩之語』との大きな違いを指摘し、前者はジャン・バセに基づくのに対し、『嘉音遵嘱咷菩薩之語』はインドという非中国語圏においてゼロから漢訳が行われた、すなわち、試行錯誤の結晶であるとする、一つの知見を示している。

ただ、さらに、「後の漢訳聖書において意訳されている訳語も音訳語を用いた」と述べている点は少し気にかかる。後との比較には実は余り意味がないように評者には思えなくもないからである。また、ラサールがそうした理由について、「ラサールが聖書の漢訳を進めるに際して、音訳する語と意訳する語の基準が彼の中で明確化されていなかったことを示しているとともに、意訳が困難であると判断したものについては音訳語を用いたという可能性もある」とするが、地名や人名といった固有名詞はそもそも意訳しがたいものである。もちろん、翻訳者の翻訳の原則はあるのだろうが、必ずしも説得力のあるものとはなっていない。「口偏の新しい漢字を作り出した」という点についても、それはラサールに始まるものでもなく、華夷訳語や、更にはそれ以前の西夏と中国との接触においても早くから見られる現象である。筆者が引いているロシア正教会のグーリー文字も口偏を多用するが、それも時代がかなり下がるものである。

「資料篇」の音訳対照表はバセ、モリソン、マーシュマン、ラサール（1810）との比較対照したものであり、漢訳聖書研究に極めて有益なものである。しかし、これも欲を言えば、『正解直解』や『古新聖経』との比較も今後是非付け加えて頂きたいものである。

いずれにしても、漢訳聖書研究に新しい資料が加わったことになり、学界に裨益すること大であると確信するものである。

ところで、評者が初めて漢訳聖書に関する論考を発表したのは、1992年の時であった。その頃に比べたら隔世の感がある。しかしながら、そこで提示した問題は現在に至るまで実は解明されていないものも多い。

一口に漢訳聖書研究と言っても、実のところ、翻訳論は当然として、言語接触研究、中国語文体論、中国語史研究、官話方言研究、異文化接触研究等々、様々な可能性を秘めている。

今後、お二人に是非お願いしたいのは特に次の2点である。

1つは、Spillett, H. W.: A catalogue of Scriptures in the languages of China and of the Republic of China, 1975の全面的見直しである。

これは所謂、「漢訳聖書目録」である。これまでに刊行された漢訳聖書を3つの文体（文理、浅文理、官話）に大別し、また官話も南北等々に区分し、更に方言訳も加えた総合目録であり、漢訳聖書研究には欠くことの出来ない工具書である。しかしながら、Bible Society's library による試用本的なもので正式な出版物ではなく、国内の図書館でもこれを所蔵しているのは京都大学人文科学研究所ぐらいで、研究者がほとんど手に取って見ることは出来ないものであった。これに新しい研究成果を取り入れた形で漢訳聖書目録の完全版を目指して欲しいと願うものである。

2つめは、1934年に出版された賈立言（A. J. Garnier）馮雪冰『漢文聖經譯本小史（Chinese version of the Bible)』（上海廣學會出版）は名著であるが、これもこれまで知る人は限られている。それに、90年近くも前のもので、すでに内容も合わなくなっている。それ以降に新しく発掘された資料も加えて、漢訳聖書の全体的系譜を明らかにすることが求められる。それは最終的には「聖経漢語翻訳史」として世に問うことになるが、是非、これも守備範囲に入れていただきたいと思っている。勿論、評者も老体にむち打ってお手伝いすることはやぶさかではない。

参考文献

内田慶市　1992 「『官話』研究における『漢訳聖書』の位置づけ」『関西大学文学論集』第41巻第2号、その後、『近代における東西言語文化接触の研究』

（関西大学出版部、2001）に収録
内田慶市　2010 「モリソンが元にした漢訳聖書―新しく発見されたジャン・バセ訳新約聖書稿本―」（内田慶市『文化交渉学と言語接触――中国言語学における周縁からのアプローチ』関西大学出版部）
内田慶市　2010 「馬禮遜參照的漢譯聖經――新發現的白日昇譯新約聖經稿本」（謝品然　曾慶豹合編『自上帝說漢語以來《和合本》聖經九十年』研道社有限公司）
内田慶市　2012 「白日昇漢譯聖經攷」『東アジア文化交渉研究』第 5 号
内田慶市　2017 「漢譯聖經研究的新的局面――以『古新聖經』為中心」（内田慶市篇『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイヴスの構築』東西学術研究所）
内田慶市　2018 『古新聖経残稿二種北堂本與満漢合璧本』（李奭學氏との共編著、関西大学出版部）
吉川雅之　2018 「ジョシュア・マーシュマンの聖書漢訳：漢字音に基づいた解明」科学研究費助成事業研究成果報告書
永井崇弘　2020 「关于19世纪印度翻译的汉译圣经及其译者和底本: 拉沙的马太福音译本」福井大学教育・人文社会系部門紀要 4